生涯スポーツ推進のための経済学的視点を取り入れた教育の可能性について

―ジェンダー・スタディーズに立脚して―

The Possibility of Education from an Economic Perspective for Promoting Lifelong Sports

―Based on Gender Studies―

佐野 信子　平工 志穂
SANO Nobuko　HIRAKU Shiho

要約

本稿は、経済学的視点からの体育・スポーツに関する論考に、ジェンダーの視点を取り込もうとするものである。2022年4月に共学校の大学生を対象としてWeb調査を実施した。結果からは、生涯スポーツにみられるジェンダー・ギャップを小さくするためには、敢えて男女差を検討することの必要性が析出された。

(1) 調査対象者達を全体でみると、知識として、スポーツ実施が現在、そして将来における金銭面での人生の豊かさに繋がることを認識している者が多かった。

(2) ところが、男女別での分析を試みると、現時点におけるスポーツ享受については、大きな男女差が認められるようになる（男子＞女子）一方で、スポーツ実施による将来における医療費や介護費等といった経済的側面での捉え方については男女差が小さく（男子≧女子）なる。

(3) スポーツに金銭を費やすことに対する女子の意識の低さは、女性の生涯スポーツ推進において「キー」となる現象と考えることもできる。つまり、あえて乱暴に分けるならば、「女子」大学生に、スポーツの現在および将来にわたる経済効果についての知識を与えることは、「男子」大学生に実施するよりも有用な結果の出ることが示唆される。

そして、将来的に、あらゆるジェンダーの人々の生涯スポーツ推進を図るためには、まずは、体育・スポーツに関連する経済学的な事象について、男女差を検討をすることが必要であることが導き出せた。

キーワード：ジェンダー、生涯スポーツ、経済学的視点

Abstract

This paper attempts to incorporate a gender perspective into the discussion of physical education and sports from an economic perspective. In April 2022, a Web survey for current university students was conducted. The results suggest that it is necessary to examine gender differences in order to reduce the gender gap observed in lifelong sports.

(1) Many of those surveyed were aware that sports practice leads to financial well-being both now and in the future.

(2) However, when analyzing the results by gender, large gender differences in sports enjoyment are presently found (males > females), while there are small gender differences in economic aspects such as future medical and nursing care (males ≧ females).

(3) Low awareness regarding the spending of money on sports can be considered a key phenomenon in the promotion of lifelong sports for women. Simply stated in other words, it is suggested that giving "*female*" college students knowledge about the current and future economic effects of sports is more useful than giving it to "*male*" college students.

Therefore, in order to promote lifelong sports for people of all genders in the future, it appears necessary to first examine economic events related to physical education and sports in terms of gender differences.

Key words: gender, lifelong sports, economic perspective

Ⅰ．はじめに

体育・スポーツ領域における研究では、男女差を導き出すことを第一義としたものが少なからず見られる。もちろん、男女差を提示することには意味があり、その必要性も理解できるところである。しかし、それらの研究にジェンダーの視点を組み入れるならば、現代社会における課題解決にさらに資することが可能となると本研究者らは考えている。そこで、本研究者らは、経済学的視点を取り入れた教育にジェンダーの視点を組み入れることの可能性を図るべく、研究の遂行を試みており、本稿では、その一部を報告する。

Ⅱ．目的

2022年度から実施される高等学校における学習指導要領の改訂により、高校生たちは「家庭科」の中で「資産形成」についても学ぶこととなった。これまでも、預貯金についてなどのテーマは取り上げられていたが、今回の改訂により、リスク管理の考え方までをも取り入れた、株式や投資信託等といった資産の形成にまで踏み込む形となっている。しかし、この件については、各メディアでニュース配信等されたものの、2022年８月時点では、未だ社会的に広く知られた様子はあまりみられない。本研究者らは、「家庭科」での「資産形成」授業の開始を受け、健康維持・増進をすること、その結果として１日でも長い期間の「健康」を手に入れることが現在そして将来の「資産形成」に繋がらないかと考えた。既に、体育・スポーツ領域において、経済学的視点からの論考の蓄積は見受けられるが、それらにおいては、新しい研究概念である「ジェンダー」の視点は、まだ、ほとんど取り込まれていないように見受けられる。体育・スポーツを経済学的視点から考察する一助とすべく、ジェンダーの視点を取り入れた、「大学体育授業での資産形成」授業を提案したいと考えた。今を生きる大学生が、スポーツすることを経済学的にどのように認知しているのかを知るために、共学の大学において、パイロット調査としての「お金とスポーツ」に関連するアンケート調査を実施するに至った。

本稿で展開するパイロット調査の報告を踏まえ、本研究者らは、同年５月16日に関東圏に位置する女子大学で本調査を実施した。対象者を「女子」に絞った理由は、以下の通りである。現状のところ我が国においては、「運動」「スポーツ」との繋がりは、「男性」に比べて「女性」というジェンダーに親和性が弱い。そのため、ファイナンシャルプランナー有資格者をゲストスピーカーとして、本研究者の一人である佐野が担当する「女性とウェルネス[(1)]」科目に招聘した。その理由としては、大学生レベルではこの程度が適切ではないかという内容についての講義を履修生らに受講してもらうことが、「女性」の生涯スポーツと「男性」の生涯スポーツの格差解消に結び付くと考えたためである。講義の概略を紹介すると以下の通りである。「ウェルネス」と「お金」がどのように結びつくのか、授業前にはほとんどの者が理解できていなかった。しかし、ゲストスピーカーの丁寧な講義内容により「ウェルネス」と「お金」の繋がりを理解することが可能となり、社会に出る前に、さらに大学１年生のうちに、「ウェルネスとお金」に関する講義を

受講しておいてよかったというリアクションが多数みられた。以上の本調査結果については別稿で発表する予定である。

以下においては、冒頭に述べたパイロット調査の結果を紹介する。関東圏に位置する共学大学の学生250名強を対象としたアンケート調査から、人数が少数過ぎるために比較を諦めた「その他」のジェンダーの者を取り除き、ジェンダーが「女性」である者と「男性」である者とを比較した。比較の内容においては、経済学的な知見に重きを置いた。広く知られている通り、大学生に至るまでの男女の運動・スポーツ実施状況を俯瞰してみると、「男性」に比べ「女性」は、積極性が弱く、自己肯定感も低い。国内において管見では、経済学的視点から男女のスポーツ実施のジェンダー・バイアスについて、ジェンダーの視点からの背景をも述べられている文献は未だ少ない。本研究者らは、体育・スポーツ分野に見られる経済学的視点に、ジェンダーの視点を加え、最終的には、「女性」「男性」「その他」といったジェンダー差を乗り越えた、あらゆるジェンダーの人々を「ひとり一人の個性にあった」生涯スポーツへと導くことに資する研究の遂行が喫緊の課題であると考えている。本研究（「生涯スポーツ推進のための経済学的視点を取り入れた教育の可能性について―ジェンダー・スタディーズに立脚して―」）のスタートとして位置するパイロット調査を実施した結果を以下に報告する。

Ⅲ．方法

１．対象者

本研究の対象者は、関東圏に位置する共学の４年制大学生の264人であった。対象者の性別は女子154人、男子106人、その他４人で、対象者の学年は１年生150人、２年生45人、３年生40人、４年生28人、５年生以上１人であった。なお、体育学部生・スポーツ学部生などに対象者を限定することはしていない。

２．調査方法

2022年４月にR大学の授業において、Webアンケート調査を実施した。本調査はヘルシンキ宣言に基づき、対象者の人権擁護を最優先に実施した。Webアンケートに際しては、口頭およびアンケートの冒頭において、調査の目的や方法を説明するとともに、調査協力は任意であること、調査は匿名での回答であり、回答の有無及び回答内容は成績等に一切影響しないことについて十分な説明を行った。

３．調査内容

調査項目は**表１**のとおりである。生涯スポーツ推進のための経済学的視点を取り入れた教育の可能性について、ジェンダー・スタディーズの観点から検討したいと考え、『生涯にわたってスポーツをすることで、将来のあなたの医療費は大幅に削減されると思いますか』、『スポーツするためにお金をかけることに抵抗がありますか』などの８項目を独自に設定し、７択式で回答を求

めた。また、『あなたにとって「スポーツ」はどんな存在ですか』、『これからの人生で「スポーツ」をするメリットは何だと思いますか』の２項目について、自由記述で回答を求めた。

表1　アンケート項目の詳細

質問項目	選択肢および回答形態						
あなたの学年は	1年生　2年生　3年生　4年生　5年生以上						
あなたの性別は	女性　男性　その他						
1）スポーツをすることは、あなたの人生にとって重要だと思いますか	全くそう思う	概ねそう思う	どちらかというとそう思う	どちらともいえない	どちらかというとそう思わない	概ねそう思わない	全くそう思わない
2）これまでの人生において、あなたはスポーツを十分に経験してきたと思いますか	全くそう思う	概ねそう思う	どちらかというとそう思う	どちらともいえない	どちらかというとそう思わない	概ねそう思わない	全くそう思わない
3）生涯にわたってスポーツをすることで、あなたの人生が経済的に潤い、豊かな人生が送れると思いますか	全くそう思う	概ねそう思う	どちらかというとそう思う	どちらともいえない	どちらかというとそう思わない	概ねそう思わない	全くそう思わない
4）生涯にわたってスポーツをすることで、将来のあなたの医療費は大幅に削減されると思いますか	全くそう思う	概ねそう思う	どちらかというとそう思う	どちらともいえない	どちらかというとそう思わない	概ねそう思わない	全くそう思わない
5）生涯にわたってスポーツをすることで、将来のあなたの介護費は大幅に削減されると思いますか	全くそう思う	概ねそう思う	どちらかというとそう思う	どちらともいえない	どちらかというとそう思わない	概ねそう思わない	全くそう思わない
6）スポーツするためにお金をかけることに抵抗がありますか	大いにある	かなりある	どちらかというとある	どちらともいえない	どちらかというとない	概ねない	全くない
7）これまでの体育の時間に「女子」というジェンダーに属する人はスポーツを熱心に実施してきましたか	大変熱心であった	概ね熱心であった	どちらかというと熱心であった	どちらともいえない	どちらかというと熱心でなかった	概ね熱心でなかった	全く熱心でなかった
8）これまでの体育の時間に「男子」というジェンダーに属する人はスポーツを熱心に実施してきましたか	大変熱心であった	概ね熱心であった	どちらかというと熱心であった	どちらともいえない	どちらかというと熱心でなかった	概ね熱心でなかった	全く熱心でなかった
あなたにとって「スポーツ」はどんな存在ですか	自由記述						
これからの人生で「スポーツ」をするメリットは何だと思いますか	自由記述						

４．統計処理

全体的な回答状況について、SPSS Statistics27（IBM Japan）を用いて、適合度のχ２検定を行った。また性差についてχ２検定を行い、有意差の見られた項目について残差分析を行った。

自由記述項目についてはKJ法（川喜田，2017）を用いて回答の分類、カテゴリー化を行った。分類化については客観性を担保するために、責任著者、共同研究者の２名で行った。

Ⅳ．結果と考察

１．全体傾向

８項目の設問の全体的な回答状況を**図１～８**に示す。

『スポーツをすることは、あなたの人生にとって重要だと思いますか』の設問については、分析の結果、回答比率に有意な偏りが認められ（$\chi^2=261.1$ $p<0.001$）、重要だと思う（「全くそう思う」が46%、「概ねそう思う」が30%、「どちらかというとそう思う」が19%）と回答した人が多く、あわせて全体の約９割であった。（**図１**）

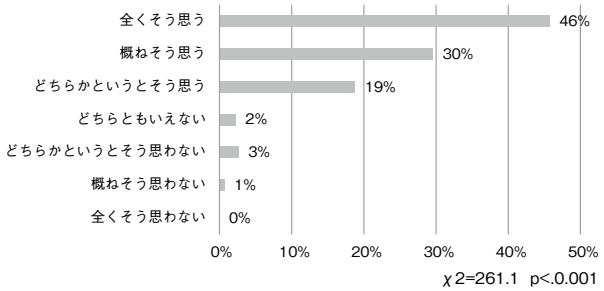


図１　「スポーツをすることは、あなたの人生にとって重要だと思いますか」についての回答結果（全体）

『これまでの人生において、あなたはスポーツを十分に経験してきたと思いますか』の設問については、回答比率に有意な偏りが認められ（χ２=204.3 p<.0.001）、十分に経験してきたと思う（「全くそう思う」が40%、「概ねそう思う」が23%、「どちらかというとそう思う」が17%）と回答した人が多く、あわせて約８割であった。（**図２**）

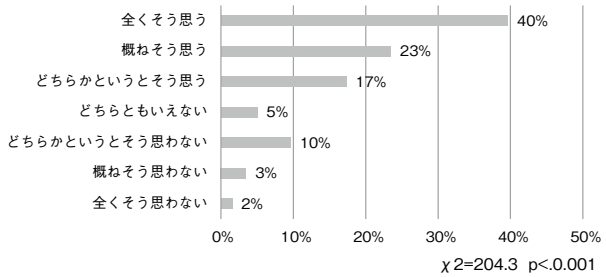


図２　「これまでの人生において、あなたはスポーツを十分に経験してきたと思いますか」についての回答結果（全体）

『生涯にわたってスポーツをすることで、あなたの人生が経済的に潤い、豊かな人生が送れると思いますか』の設問については、回答比率に有意な偏りが認められ（χ２=120.3 p<.0.001）、豊かな人生を送れると思う（「全くそう思う」が31%、「概ねそう思う」が30%、「どちらかというとそう思う」が20%）と回答した人が多く、あわせて全体の約８割であった。（**図３**）

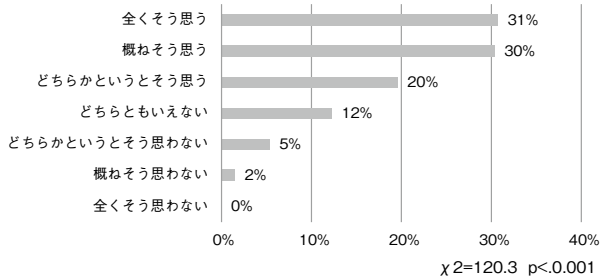


図３　「生涯にわたってスポーツをすることで、あなたの人生が経済的に潤い、豊かな人生が送れると思いますか」についての回答結果（全体）

『生涯にわたってスポーツをすることで、将来のあなたの医療費は大幅に削減されると思いますか』の設問については、回答比率に有意な偏りが認められ（$\chi 2=172.9$ $p<.0.001$）、医療費が大幅に削減されると思う（「全くそう思う」が17％、「概ねそう思う」が28％、「どちらかというとそう思う」が31％）と回答した人が多く、あわせて全体の８割近くであった。（**図４**）

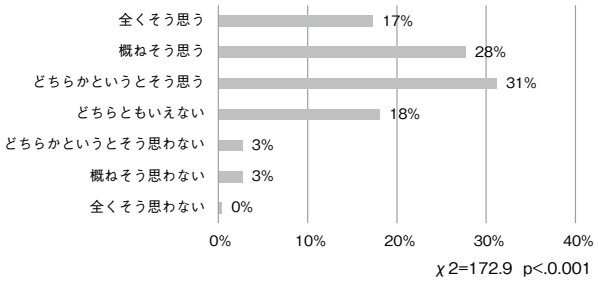


図４　「生涯にわたってスポーツをすることで、将来のあなたの医療費は大幅に削減されると思いますか」についての回答結果（全体）

『生涯にわたってスポーツをすることで、将来のあなたの介護費は大幅に削減されると思いますか』の設問については、回答比率に有意な偏りが認められ（$\chi 2=178.5$ $p<.0.001$）、介護費が大幅に削減されると思う（「全くそう思う」が18％、「概ねそう思う」が32％、「どちらかというとそう思う」が29％）と回答した人が多く、あわせて全体の約８割であった。（**図５**）

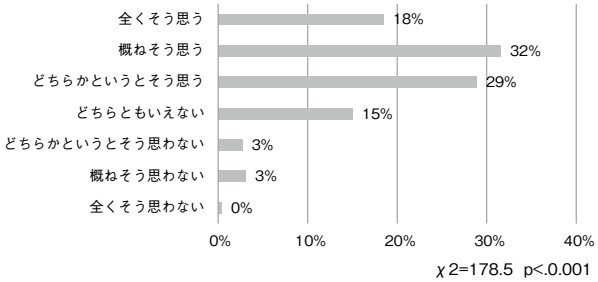


図５　「生涯にわたってスポーツをすることで、将来のあなたの介護費は大幅に削減されると思いますか」についての回答結果（全体）

『スポーツするためにお金をかけることに抵抗がありますか』の設問については、回答比率に有意な偏りが認められ（$\chi 2=123.0$ $p<.0.001$）、「どちらかというとない」が29％と最も多く、次いで「どちらかというとある」が28％であった。（**図６**）

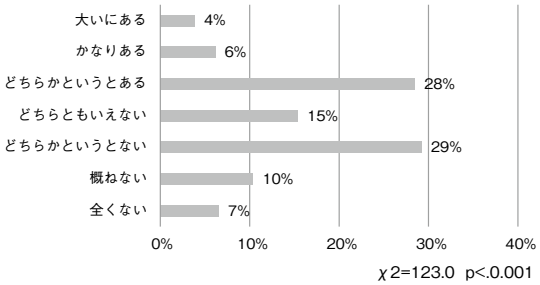


図６　「スポーツするためにお金をかけることに抵抗がありますか」についての回答結果（全体）

『これまでの体育の時間に「女子」というジェンダーに属する人はスポーツを熱心に実施してきましたか』の設問については、回答比率に有意な偏りが認められ（χ２=73.6 p<.0.001）、「どちらともいえない」が25％と最も多く、次いで「概ね熱心であった」が24％であった。（**図７**）

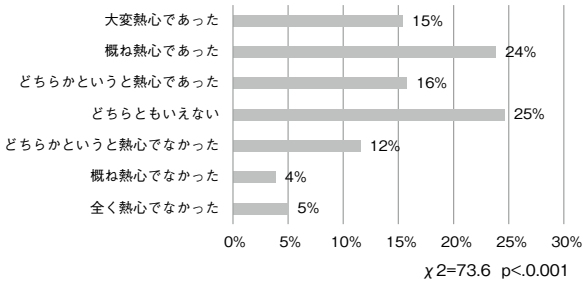


図７　「これまでの体育の時間に「女子」というジェンダーに属する人はスポーツを熱心に実施してきましたか」についての回答結果（全体）

『これまでの体育の時間に「男子」というジェンダーに属する人はスポーツを熱心に実施してきましたか』の設問については、回答比率に有意な偏りが認められ（χ２=160.2 p<.0.001）、「概ね熱心であった」が38％と最も多く、次いで「大変熱心であった」が26％であった。（**図８**）

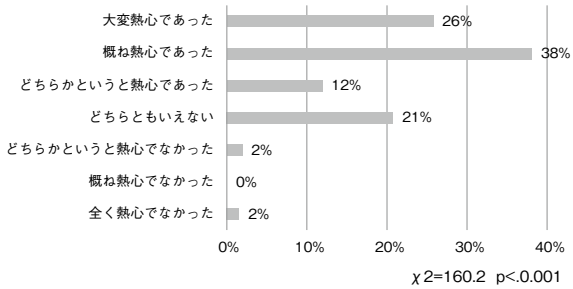


図８　「これまでの体育の時間に「男子」というジェンダーに属する人はスポーツを熱心に実施してきましたか」についての回答結果（全体）

全体傾向については、以下の点が注目される。

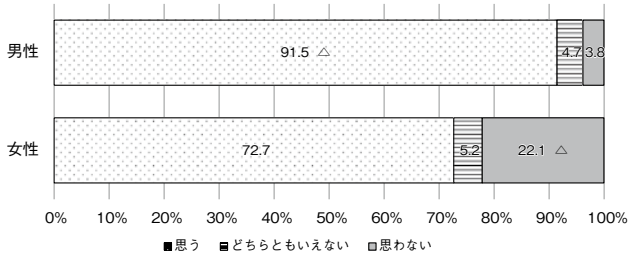
全体的にみると、調査対象者の学生達は、スポーツ実施によって、人生が経済的に潤い、また、将来の医療費や介護費にも良い影響を与えていると認識している者の割合が高いことが分かる。ところが、スポーツ実施のために、金銭を投資することについては、「抵抗がある者」と「抵抗がない者」の二極化が見られる。

体育の時間の熱心さについては、「女子」「男子」というジェンダーにより、その熱心さの程度に対する応答に大きな差が見られ、全体的傾向として「男子」の方が圧倒的に体育の時間に熱心に参加していたという評価が見られる。

２．ジェンダーの影響

アンケートの８項目について、性差の検討を行った。分析にあたって、回答選択肢を３グループに分類した。分類については、**表１**に示した質問項目１）から５）は「全くそう思う」、「概ねそう思う」、「どちらかというとそう思う」を「思う」、「どちらかというとそう思わない」、「概ねそう思わない」、「全くそう思わない」を「思わない」としてまとめ、３グループを作成した。質問項目６）は「大いにある」、「かなりある」、「どちらかというとある」を「抵抗がある」、「どちらかというとない」、「概ねない」、「全くない」を「抵抗がない」としてまとめ、３グループを設定した。質問項目７）と８）は、「大変熱心であった」、「概ね熱心であった」、「どちらかというと熱心であった」を「熱心であった」、「どちらかというと熱心でなかった」、「概ね熱心でなかった」、「全く熱心でなかった」を「熱心でなかった」としてまとめ、３グループを作成した。３グループに分類したアンケート結果について、性差による分析結果を**図９～16**に示す。

『これまでの人生において、あなたはスポーツを十分に経験してきたと思いますか』について、有意な性差（$\chi 2=17.18$, $p<.01$）が認められた．残差分析を実施した結果、「スポ―ツを十分に経験してきたと思う」は女性（72.7％）に比べて男性（91.5％）の割合が有意に高く、一方、「思わない」では男性（3.8％）に比べて女性（22.1％）の割合が有意に高かった。（**図９**）



＊χ２検定で５％水準で有意　△残差分析の結果５％水準で有意に高い

図９　「これまでの人生において、あなたはスポーツを十分に経験してきたと思いますか」についての回答結果（男女別）＊

『スポーツするためにお金をかけることに抵抗がありますか』について、有意な性差（$\chi 2= 7.97$, $p< .05$）が認められた．残差分析を実施した結果、「抵抗がある」は男性（40.8％）に比べて女性（44.2％）の割合が有意に高く、一方、「抵抗がない」では女性（39％）に比べて男性（48.9％）の

割合が有意に高かった。（**図10**）

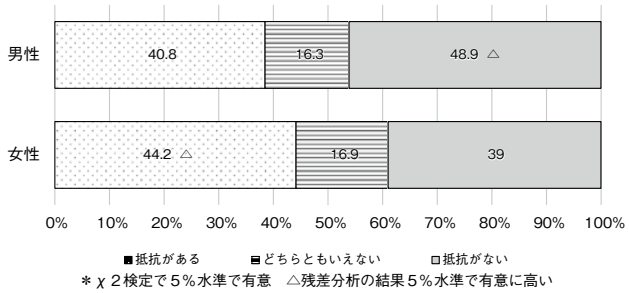


図10 「スポーツをするためにお金をかけることに抵抗がありますか」についての回答結果（男女別）＊

『これまでの体育の時間に「女子」というジェンダーに属する人はスポーツを熱心に実施してきましたか』について、有意な性差（$\chi 2=41.04, p< .01$）が認められた．残差分析を実施した結果、「熱心であった」は男性（32.1％）に比べて女性（70.8％）の割合が有意に高く、一方、「熱心でなかった」は女性（16.2％）に比べて男性（26.4％）の割合が有意に高かった。（**図11**）

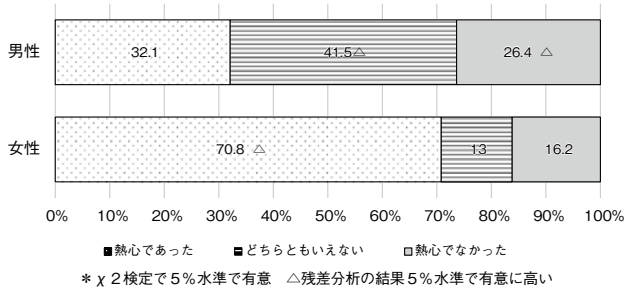


図11 「これまでの体育の時間に「女子」というジェンダーに属する人はスポーツを熱心に実施してきましたか」についての回答結果（男女別）＊

『これまでの体育の時間に「男子」というジェンダーに属する人はスポーツを熱心に実施してきましたか』について、有意な性差（$\chi 2=22.04, p< .01$）が認められた．残差分析を実施した結果、「熱心であった」は女性（66.9％）に比べて男性（88.7％）の割合が有意に高く、「どちらともいえない」は男性（6.6％）に比べて女性（30.5％）の割合が有意に高かった。（**図12**）

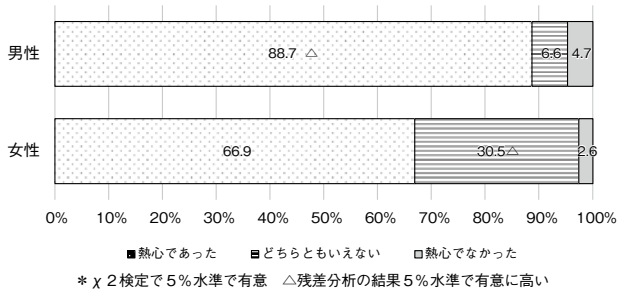
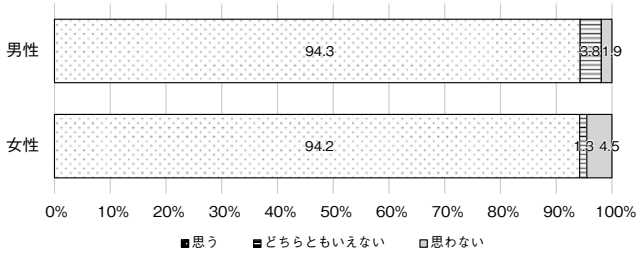


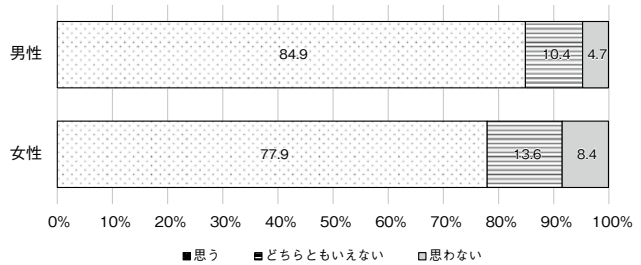
図12 「これまでの体育の時間に「男子」というジェンダーに属する人はスポーツを熱心に実施してきましたか」についての回答結果（男女別）＊

一方、『スポーツをすることは、あなたの人生にとって重要だと思いますか』（**図13**）、『生涯にわたってスポーツをすることで、あなたの人生が経済的に潤い、豊かな人生が送れると思いますか』（**図14**）、『生涯にわたってスポーツをすることで、将来のあなたの医療費は大幅に削減されると思いますか』（**図15**）、『生涯にわたってスポーツをすることで、将来のあなたの介護費は大幅に削減されると思いますか』（**図16**）の設問については、有意な性差は認められなかった。



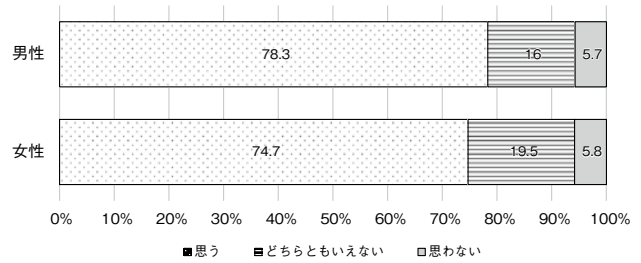
＊χ２検定で５％水準で有意　△残差分析の結果５％水準で有意に高い

図13 「スポーツをすることは、あなたの人生にとって重要だと思いますか」についての回答結果（男女別）



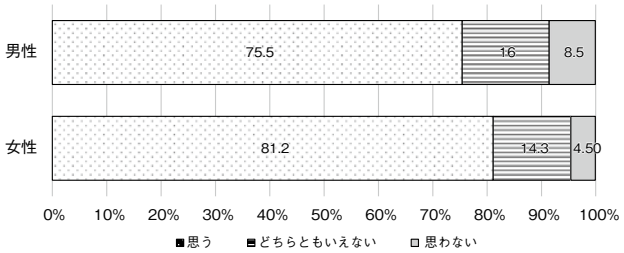
＊χ２検定で５％水準で有意　△残差分析の結果５％水準で有意に高い

図14 「生涯にわたってスポーツをすることで、あなたの人生が経済的に潤い、豊かな人生が送れると思いますか」についての回答結果（男女別）



＊χ２検定で５％水準で有意　△残差分析の結果５％水準で有意に高い

図15 「生涯にわたってスポーツをすることで、将来のあなたの医療費は大幅に削減されると思いますか」についての回答結果（男女別）



＊χ２検定で５％水準で有意　△残差分析の結果５％水準で有意に高い

図16 「生涯にわたってスポーツをすることで、将来のあなたの介護費は大幅に削減されると思いますか」についての回答結果（男女別）

ジェンダーの影響については、以下の点が注目される。

学生たちの、現時点での、スポーツの重要性についての認知やスポーツ経験については大きな男女差がみられる。しかし、未来の経済的な潤いや、将来の医療費や介護費にスポーツが良い影響を与えるかどうかについては、男女差が小さくなっている。

ところが、スポーツ実施のために、金銭を投資することについては、女子に「抵抗がある者」の割合が高く示される。

体育の時間の熱心さについては、「女子」「男子」というジェンダーにより回答傾向に異なりが認められ、異性の体育実施については「どちらとも言えない」と回答する者の割合が極めて高いことが注目される。この傾向からは次の点が推察される。「女子」「男子」共に、異性の体育実施状況を見ていないのではないか。つまり、学習指導要領解説保健体育編で「男女共習」の推奨が記載されているが、今回の調査対象者達は、「男女共習」授業の経験が無い、あるいは、少ないと考えられ、「男女共習」が当たり前の時代には未だなっていないことを指摘できよう。

３．自由記述

質的データからは以下のような傾向が見られた。

表２に『あなたにとって「スポーツ」はどんな存在ですか』の自由記述回答をKJ法によって分類した結果を示す。回答者からは295の有効回答が得られた。それらを分類した結果、４つのカテゴリーに大別された。最も多かったのは、「人生を豊かにする・生きがい」(52.5%）であった。

表３に『これからの人生で「スポーツ」をするメリットは何だと思いますか』の自由記述回答をKJ法によって分類した結果を示す。337の有効回答が得られた。分類の結果、最も多かったのは「身体的健康につながる」(60%）であった。

自由記述からは、以下の点が注目される。

表２から、スポーツが、現代的な健康観であるところの「ウェルネス」に繋がる存在であることは多くの者が認識している一方で、数としては少ないものの、「苦手・嫌い」という意識を持つ者の存在には留意すべきであろう。

表３から、「人生や生活を豊かにする」という応答に「金銭的な豊かさ」を読み取ることが可

能であるかどうかさらなる検討が必要である。

上記の２項目は、今後の課題として位置付けることができよう。

表2　『あなたにとって「スポーツ」はどんな存在ですか』の回答のKJ法による分類

カテゴリー	具体例
身体的健康につながる 58（19.7%）	健康を維持するためのもの、からだの機能を向上させるもの、運動能力を向上させる
精神的健康につながる 62（21.0%）	リフレッシュできるもの、ストレス発散、息抜き、気分転換、悩み事を忘れられる
人生を豊かにする・生きがい 155（52.5%）	楽しいもの、遊び、趣味、生きがい、交流の幅を広げるもの、仲間を作るためのもの、毎日を豊かにしてくれるもの
苦手・嫌い 20（6.8%）	あまり好きじゃない存在、嫌い、嫌なこと、疲れる存在、苦手、喘息発作が出るもの

有効回答数295　（数値）は%を示す

表3　『これからの人生で「スポーツ」をするメリットは何だと思いますか』の回答のKJ法による分類

カテゴリー	具体例
身体的健康につながる 202（60.0%）	健康維持、健康になる、健康寿命をのばす、からだの衰えを防ぐ、運動能力を向上させる、体力の維持
精神的健康につながる 53（15.7%）	気分転換、リフレッシュ、ストレス発散、精神の安定、精神の健康
人生を豊かにする・生きがい 82（24.3%）	人生が豊かになる、生活を豊かにする、仲間ができる、コミュニティ形成、人脈づくり、楽しく生きていける、人として成長できる

有効回答数295　（数値）は%を示す

Ⅴ．結論

本稿で検討した、本研究であるところの「生涯スポーツ推進のための経済学的視点を取り入れた教育の可能性について―ジェンダー・スタディーズに立脚して―」のパイロット調査結果のうち特に重要な項目として以下の点が挙げられよう。

全体傾向を示す分析から、調査対象者達は、知識として、スポーツ実施が現在、そして将来における金銭面での人生の豊かさに繋がることを認識している者が多かった。

ところが、男女別での分析を試みると、現時点におけるスポーツ享受については、大きな男女差が認められるようになる（男子＞女子）一方で、スポーツ実施による将来における医療費や介護費等といった経済的側面での捉え方については男女差が小さく（男子≧女子）なる。

さらに、スポーツに金銭を費やすことに対する女子の意識の低さは、女性の生涯スポーツ推進において「キー」となる現象と考えることもできる。つまり、あえて乱暴に分けるならば、「女子」大学生に、スポーツ実施による現在および将来にわたる経済効果についての知識を与えることは、「男子」大学生に実施するよりも有用な結果の出ることが示唆される。

「Ⅱ. 目的」で述べたように、本研究の社会的意義としては、体育・スポーツ分野に見られる経済学の視点に、ジェンダーの視点を加え、最終的には、「女性」「男性」「その他」といったジェンダー差を乗り越えた、あらゆるジェンダーの人々を「ひとり一人の個性にあった」生涯スポーツへと導くことに資する研究を遂行することである。

本稿の「Ⅳ．結果と考察」の「１．全体傾向」と「２．ジェンダーの影響」との比較においては、特に、本研究が射程としている生涯スポーツ推進のための経済学的視点へのジェンダー・スタディーズの導入、具体的には本稿においては男女差の比較に意味があることを示すことが可能であった。未だ、体育・スポーツ研究においては、男女差を導くことに目的を置いた、つまり、ジェンダー・バイアス解消を目指す意図のない男女差の比較研究がしばしば見られる。本稿においては、ジェンダー・ギャップを小さくするために、「敢えて」男女差を検討した点に注目されたい。

以上から、いわば、「ジェンダー」に配慮した体育実践を考える際には、残念ながら、一足跳びに「男女差」の検討をやめるまでにはまだ日本社会は成熟していない、という結論が導き出せる。

Ⅵ．今後の課題

まず、「Ⅱ．目的」で言及した女子大学生を対象とした本調査の分析を速やかに実施し、発表することが挙げられる。また、本研究をさらに発展させ、ジェンダーの多様性に応えうる体育授業の在り方について、具体例も紹介しつつ、提言することも重要な研究であると考えている。

謝辞

パイロット調査に協力して下さった学生の皆さん、そして、本研究にインスピレーションを下さったファイナンシャルプランナーの滝田祐介先生に心から感謝の気持ちをお伝えいたします。

注１　本講義を展開した女子大学においては、「体育」や「スポーツ」という用語ではなく、「ウェルネス」が使用されている。また、本研究者のひとりである佐野の所属学科名は「ウエルネス」と全て大文字であるが、本稿においては、授業展開大学での表記に倣い「ウェルネス」とする。

文献

生田　久美子編著（2011）『男女共学・別学を問いなおす―新しい議論のステージへ―』東洋館出版社。

池田　勝（2002（1982））「体育活動の経済的価値」池田勝編著『生涯スポーツの社会経済学』杏林書院。

川喜田　二郎（2017）『発想法　創造性開発のために』中公新書。

小林　至（2020）『[新装改訂版]スポーツの経済学』株式会社ＰＨＰ研究所。

佐々木　勝（2021）『経済学者が語るスポーツの力』有斐閣。

佐野　信子（2018）「男女共修・男女共習」飯田貴子ら編著『よくわかるスポーツとジェンダー』ミネルヴァ書房。

佐野　信子（2022）「ジェンダー：スポーツにおける男女二元論の撹乱」高峰修ら編著『現代社会とスポーツの社会学』杏林書院。

安田　秀一（2020）『スポーツ立国論』東洋経済。